

女と男いきいきネット

ひとひと
女と男いきいきネットワーク久喜・通信第27号 2017, 6, 23 発行



四月十四日(金)午後一時半より、女と男いきいきネット第十四回総会がふれあいセンター久喜視聴覚室にて開催され、二部では総会記念講演が行われました。

講師は、加須市で子ども支援を行っている一般社団法人すくすく広場理事長の坂本佳代子さん(臨床発達心理士)です。

被災者支援から、子育て支援へ
坂本さんの所属する日本臨床発達心理士会埼玉支部は、二〇一一年から昨年末まで加須市で『ピエロの遊び広場』の活動を続けてきました。この活動の発端は、あの三・一一東日本大震災後の被災者支援でした。埼玉支部は、三月二十一日〜三月三十一日、さいたまスーパリアリーナ二階

「地域における子ども食堂」

講師 一般社団法人すくすく広場・理事長
坂本佳代子さん(聖学院大学客員教授・臨床心理士)



Bゲート入口付近で、午前と午後二回の「遊び広場の開設」と「障がい者家族のヒヤリング・障がい児の関西地区移転予定者の状況調査・風呂サービスの検討」を行いました。

あの時期に子どもに注目する人はだれ一人おらず、多くはまず「高齢者どうするの?」「透析をする人をどうするの?」「人工呼吸の人はどうするの?」「酸素はどうなってるの?」「等大変なところに目が行きました。しかし、埼玉支部は「無論そこは大事だけど、そこは一定の手当てがされている。しかし、一見元氣そうに跳ね回っている子どもたちに手を差し伸べ、この子たちを何とかしないと大変だぞ」という発想で埼玉県庁に直接話に行き、場所を確保し、「遊び広場」を開設したのです。

子どもへの支援とは待ったなしでしなければならぬこととで、一見元氣そうに見えても子どもも「食べること・寝ること」と同じように、「遊ぶこと」がうばわれると育ちが



子どもへの支援とは待ったなしでしなければならぬこととで、一見元氣そうに見えても子どもも「食べること・寝ること」と同じように、「遊ぶこと」がうばわれると育ちが

損なわれるという危機感を持ち、坂本さんたちはそれを実践しました。遊具としては、子どものレストラン発散となり、限られたスペースでも身体を動かす声を出して遊べるものを準備したそうです。初めは良い子を演じてスタッフの指示通りに応答していた子どもたちが、慣れてくるに従って、不満や甘えの感情を表現するようになり、制限の多い生活空間で押し殺していた感情を、安心できるスタッフにぶつけていったと言います。

また、「障がいのある子どもが、長期避難する場で少しでも生活しやすくなるような連携・調整役割」も、大きな目的の一つでした。スーパリアリーナに行ったときに、明らかに自閉症だなどわかる小さなお子さんがおじいちゃんを従えて「わぁー」と叫んで走り回り、階段を上ったり下りたりする光景を目の当たりにしたそうです。おじいちゃんはずきつきりで片時も離れられないのですが、自閉症のお子さんにとって環境が変わ

るといふことがどんなに大変なのかということをお話しています。強制的に避難させられてきて、環境が変わり、静かにしろと言っても静かになるわけではない障がいのあるお子さんを抱え困っていた家族は幾組もいたとのこと。「遊び広場」は、そういう家族の負担軽減を図ると同時に、受け入れ先・旧騎西高校のある加須市で、この子達をきちんと受け入れてもらうための準備も進めました。

アリーナから旧騎西高校へ

そして、埼玉支部は、双葉町民が次の避難先として「旧騎西高校避難所」に移るといふ情報が入った時点で、加須市のボランティアセンターに登録をし、①同室者とのトラブル等を抱えている気になる方、②発達障がい児の家族、③退院後の方などのへ傾聴活動を開始しました。一方で、加須市に移ってからも「遊び広場」を継続して行いました。とは言うものの、旧騎西高校体育館は、一つは物資の配給所で一つは寝泊りの場所で、

空いた空間・子ども遊び場はどこにもありませんでした。そこで騎西高校から歩いて七、八分のコミニティセンターを借りて、「ピエロの遊び広場」を四月二十三日から行ったそうです。

朝スタッフが避難所館内を廻り、保護者の了解を得て、一緒にコミセンまで移動し活動しました。五月からは昼食も提供し、「身体を使った遊び」「昼食作り」「特別支援教育士による理科実験」等、十時から十四時まで、コミセンで遊んだ後、スタッフと一緒に避難所に戻るといふ流れに



変わったそうです。昼食は、二回目からは子ども達も参加し、メニュー決めから料理まで一緒に行いました。

お母さんたちが子育てのことで相談があるときはどうぞと、「サロン」も用意していました。子どもが遊んでいるときは、ここでお茶菓子を食べながらコーヒを飲んでいていいという「サロン」を作っていたのですが、そのうちお母さん達も昼食作りに参加するようになったとのこと。遊びと、お昼を一緒に作って同じものを一緒に食べるといふことが全部セットになり、それを『ピエロのパッケージプログラム』と名付けたそうです。



旧騎西高校避難所の閉鎖

二〇一三年一二月、旧騎西高校避難所は閉鎖になりました。

多くの被災者の方たちは近隣に住まいを設けましたが、埼玉支部は子どもたちがそれなりに発達していく中で、まだ関わりが必要だと思いがら活動を続けました。双葉



から来た子どもたちが加須のコミュニティの中に入りこみ、と入れるのだろうか? 「分け隔てなく生活できるようなになれば私たちは手を引けるね」と思いながらもまだ手を引かないでいました。ところが、そのうちに参加する人たちの殆んどが加須の人たちにならなくなってきました。そして、双葉の人たちは「もう双葉と言わないうで」と言うようになりました。坂本さんは、これは健全な流れだと言います。

その後、双葉町役場がいわき市の方に移り、同時にいわきの方に住まいを変えた方が

大勢いました。坂本さんたちとなじみの親子も、いわきの方にスキマしました。

が、その人たちが「遊びの広場」があるとその時に加須に戻ってきたそうです。サロンのではお母さんたちが「よかつた」などとおしゃべりをし、子どもは子どもで久しぶりに会うと嬉しいし、互いを大事にしあう素敵な再会が生まれたとのことでした。

「すくすく広場」の誕生

しかし、そのうちにだんだん来ていた人たちが、食事は無料だったため「食べに来てるのかな?」と思えるようになりなりました。また、四時に「遊びの広場」が終わった後も子どもたちが帰らない。騎西のコミュニティセンターが終わるまでいて食べ物などを散らかして、監督不行き届きで坂本さんたちが怒られるようになり日々が続きました。

坂本さんたちはこれらの問題を「食べる」として捉え、居場所の問題として捉えませんでした。統計を取ったわけではないので、日本の全国平均子

ども六人のうちの一人が貧困であるという統計結果が加須に当てはまるかどうかはわからないものの、実感として食べることを居場所を求めていることを感じたそうです。そこで、加須の中で子育て支援に関わっていくのが必要なことだという結論に至りました。そして、今年の二月に、加須市内でも双葉町を支援していたNPO法人加須ふれあいセンターの方々と、子育て支援を目的にした『一般社団法人すくすく広場』を設立したのです。具体的活動は、遊びを通じた子ども居場所づくりと食の提供、学習支援です。

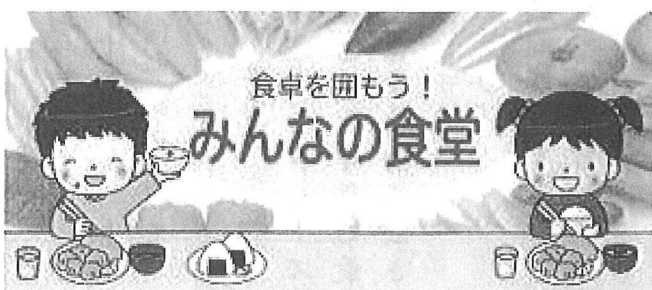
『みんなの食堂(子ども食堂)』

「遊ぶこと、学ぶこと、食べること」の三つを柱にした坂本さんたちの活動の中に、『みんなの食堂(子ども食堂)』があります。「子ども食堂」は、日本中でその言葉が認知されてきましたが、そうなること「あそこは貧乏な奴らが行くところだ」などという世の中の見方が生まれる可能性もあるので、坂本さんたち

はその言葉は避けたいと思います。『みんなの食堂』と言っています。特別な子どもだけが来るというところが目立たないように、という配慮をしているのです。また、「子どもだけが来るのでなくて地域の誰が来てもいいよ」というメッセージも込めて、この名前にしているとのことでした。地域の様々な方々が運営に関わっています。

今加須では、被災者支援から生まれたたくさんの団体・個人の活動がタンポポの綿毛のように飛んでいて、新たな地域ネットワークをつくり、花開いていくように思えます。た。

(文責・進藤)



サムエルさんが語る「ルワンダと若者について」

グループ・フォー代表 倉持 睦子

例年二月に行われる With

You や、たまフェスティバルに舞台発表と展示で参加しました。このフェスティバルには、女と男いきいきネットワーク久喜(展示)・ABC工房(展示)・なの花会(舞台発表)等も参加しています。また、久喜市はフェスティバルに合わせて「With You」を、1日体験学習ツアーを実施しており、久喜市から参加している団体として心強く感じています。

平成二十八年六月に投票年齢が十八歳に引き下げられたこともあり、舞台発表のテーマを「ルワンダの発展と若者の役割」としました。ルワンダは女性の国会議員の割合が世界一高いことで知られていますが、若い人から選挙制度を含め国のあり方について

聞くために在日ルワンダ大使館の広報官イマニシムエ・サムエル氏をお招きしました。

ルワンダの投票年齢は十八歳で日本と同じですが、立候補可能年齢は日本より若い二十一歳です。一九九四年の大虐殺の影響もあり、三十五才以下の人口が六〇〇を占めるルワンダでは、「人口の大きな割合を占める人々の参加なしに国家の発展はない」との理念で若者の政治参加を推進しています。日本の衆議院に当たる下院では定数八十名中、比例代表制の一般選挙での選出の他に十六〜三十歳の若者を対象とした青年評議会に二議席が割り当てられています。ちなみに女性には二十四議席、障害者に一議席の割り当てです。

国民同士や指導者との意見

交換や指導者同士の意見交換・共通理解、大統領と自治体や組織の指導者のビジョンの共有のための場として特定の日が幾つも定められています。特に毎月最終土曜日に行われる「ウムガンダ」は、「国のための働く日」と位置づけられています。地域の住民やリーダーとの意思疎通や意見交換の場としても機能しています。

遠いアフリカの話ですが、少子高齢化へと進む日本の行く道を考えながら聞きました。



【編集後記】

●毎年六月二十三日〜二十九日は「男女共同参画週間」で、全国でさまざまなイベントが行われている。それに先立ち、内閣府ではキャッチフレーズを募集しているが、今年の最優秀賞は埼玉県・土橋義広さんの次の作品に決まった。

「男で〇、女で〇、

共同作業で〇。」

ここ三年間の受賞作品は、次のもの。

「意識をカイカク。男女でサンカク。社会をヘンカク。」

「地域力×女性力」

無限大の未来」

「家事場のパパチカラ」

どれもこれもなかなかの力作で、的を得ている。

さて、久喜市でも毎年『男と女のつどい』が開催され、募集した川柳が展示される。今年もどんな面白い作品に出会えるか、楽しみである。(進藤)

【発行】

女と男いきいきネットワーク久喜
代表 倉持睦子(22)4545